

新潮文庫

血の来訪者

大藪春彦 著



新潮社

ちらいほうしや
血の来訪者



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草81 B

昭和四十八年七月三十日 発行
昭和四十八年十一月十日 印刷

著者
大おお藪やぶ春はる彦ひこ

発行者
佐藤 亮 一

発行所
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

血 の 来 訪 者

大 藪 春 彦 著

血の来訪者

「野獣死すべし」第三部

黒い瞳ひとみの若者が

一

訪者 疾走するタクシーやトラックの騒音が、暗い地霊のうなりのように夜気を震わせていた。騒音を越えて、断続的なクラクションの音が鋭く吠えた。
来 クラクションの響きにかぶさって、甲高いパトカーの咆哮が近づき、そして、急速に遠ざかっていった。

血 一瞬の静寂がきた。静寂は、サイレンや半鐘を乱打しながら驚走する消防車の群れによって、粉々に引き裂かれた。

洒な家があった。大通りから外れた西落合二丁目の一郭。緑の濃い住宅街のなかに、模造石の塀でかこまれた瀟

風が庭の木々の梢をかすかに鳴らせた。洋風の建物の窓から、灯火は漏れてはいなかった。寝室は暗かった。暗闇のベッドの上でライターの発火金が稲妻形の閃光をひらめかせた。石綿の芯に移った火が、緑がかった黄色い炎をあげた。

5 ライターの炎に、浅黒くひきしまった秀麗な青年の顔が浮き出た。深い瞳は、暗く愁いを含ん

でいた。

青年は仰向けになったまま、彫ったように形のいい唇にくわえたタバコに火を移した。広く厚い胸には、筋肉の輪郭がくつきりと浮きあがっていた。

青年の左に、セシル・カットの髪を乱した若い娘が横向きになっていた。盛りあがって上むきに尖った胸の谷間は、汗で濡れていた。乳首は、まだ硬くふくらんでいた。

青年はライターの火を消した。鞭のようにしなやかな筋肉を持つ腕をのばし、卓子のスタンドの豆ランプをつけた。淡い光が流れ出た。

「灯を消したままにして……邦彦さん」

女は、陶酔の余波を噛みしめるかのように、瞼を閉じたまま柔らかな声で囁いた。金色がかった生毛の光る腕を無意識にのばし、毛布を胸のあたりまでずりあげた。

「また、火事だな」

伊達邦彦は、タバコをくわえたまま穏やかな声で呟いた。タバコの火口が、独立した生きもののように躍った。

「怖いわ。しっかりつかまえててね」

神野知佐子は真珠の歯を見せて微笑した。

邦彦はくるっと体の向きをかえ、知佐子とむかいあった。火のついたタバコの吸口を、知佐子の軽くまくれあがった上唇と、ぽっちゃりした下唇のあいだに差しこんだ。

知佐子は、煙を口のなかだけにためてフーッと吐き出した。濃い睫毛にふちどられた瞼を開いた。翳をたたえてくぼんだ大きな瞳が、かすかに上むきに反った細い鼻とつりあいがとれていた。

「火事か。火には生命があるね。崩れゆくものの最後の生命だ」

タバコを灰皿で揉み消した邦彦は、知佐子の髪を撫でながら物憂げに言った。よく透るバリトンだった。

「サイレンを聞くと、あなたはいつも考えこむのね。なにか想い出でもあるのかしら？」

邦彦は答えなかった。瞳が暗く光ってきた。

「いま何時ごろかしら？」

知佐子は邦彦の裸の胸に顔を埋めた。

「十時半」

邦彦は卓子の上から持ちあげた時計をもとに戻した。

知佐子は長い溜息をつき、邦彦の頭を抱えた。おのずからウェーブのかかった邦彦の髪は柔かった。

「十時半……あと一時間しかないのね。二人でこうしていられるのは」

知佐子は呟いた。

「また、会ってくれるね？」

邦彦の声は優しかった。

「会えないのなら、知佐子、気が狂って死んじゃうわ」

「僕もだ」

邦彦の唇の端が、知佐子から見えない位置で、ねじくれたように、つりあがった。

「どうしてパパはあんなに強情なんでしょう。いつまでもしつこく忠雄さんをおしつけるのなら、私も覚悟があるわ。あなたのことをうちあけてしまおうと思ってるのよ。そうすれば、わたし、肩の荷が降りるわ。たとえばパパやママが、親子の縁を切るってさわいでも、わたしの知ったことでないわ。わたしには、あなたという人がいるんですもの……」

知佐子は邦彦の逞しい胸に唇をおしあてた。

「僕のことをお父さんにうちあける？」

声は優しかったが、邦彦はビロードのような眉をしかめた。

「ええ」

「これまでは、僕のことをしゃべらなかったろうね？」

右手を知佐子の背に滑らせながら、邦彦は尋ねた。

「誰にも……でも、もう我慢出来ないわ、わたし一人の胸のなかにしまっておくには、あなたは、あまりにも大きな位置をわたしの心のなかに占めてしまったわ」

知佐子は、邦彦の胸に接吻の雨を降らした。

邦彦は知佐子の腰を愛撫した。

「有難う。それほどまでに僕のことをおもってくれて……でも、僕等の関係をうちあけるのは、まだ早いよ。お父さまを悲しがらすだけだ」

「父は父、わたしはわたしだわ」

「でも、君と忠雄君は、婚約している」

「あなたが、そんな弱気とは知らなかったわ！」

知佐子はくるっと邦彦に背をむけ、色が変わるほど強く唇を噛んだ。

二

「御免ね。でも、僕は君のことを思ってたんだ」

邦彦はレモンの匂いのする知佐子の髪に唇を寄せた。手は器用に動いて知佐子の胸をおおった。「わたし、忠雄さんが好きだったわ。親の決めたあの人と将来は一緒になるものと、みんなも思いこんでいたし、私も疑ってもみなかったわ——」

知佐子は自分に言いきかすような口調で淡々とべていたが、急にはげしい口調になって、「でも、それはあなたが私の前に現われるまでのことよ。あなたは私の心を虜にし、私の体を奪ってしまった。あなたさえいなかったら、私は何も知らないなりに幸福だったかも知れない。私はあなたが憎い。いいえ、死ぬほど好きだわ」

知佐子の眼から涙がこぼれ落ちた。

邦彦は、僕だって君が死ぬほど好きなんだ、と、呪文のようにくりかえしながら、熱い息を知佐子の項に吐いた。しかし、瞳は暗く虚ろだった。

「忠雄さんは諦めてくださると思うわ。考えてみたら、あの婚約は、結局のところ政略のためなんですもの。父の持っている大東電機と、忠雄さんの方の三協銀行のきずなを固めるための……」

知佐子は、かすれたような声で言った。

「僕は忠雄君を個人的に知らないからわからないが、でも、彼は君を好きなんだろう？」
「どうして、そんなに逃げ腰なの。知佐子、かなしくなってきたわ」

「いや、逃げ腰だなんてとんでもない——」邦彦は強い声で言った。

「ただ、僕らのことをそう急にうちあけてしまつては、まずいと思って」

「でも……」

知佐子の背がこわばった。

「君のところは厳格な家庭だろう。いきなり君が僕と結婚したいと言つたつて許してくれるはずはない。それどころか、僕は徹底的に恨まれる」

邦彦は知佐子の背を撫でながら言つた。

資本金百億を誇るマンモス企業、大東電機は、知佐子の父である神野洋一がほとんど独力でその礎をきずきあげた。邦彦は知佐子を媒介として、神野家の一員にのしあがるのを目論んでい

た。

「たとえば家から放り出されてもかまわない。ねえ、邦彦さん、聞いて——」

知佐子は邦彦のほうにむきなおり、豆ランプの光が深い影をつくつたその瞳を覗きこんだ。

「私、あなたの赤ちゃんが出来るらしいの」

「なに！」

邦彦の瞳は動揺した。

「あなたを驚かそうと思って、さっきまで黙つてたの。うれしい？ だから、待てないのよ」

知佐子の瞳はランプよりも強く輝いた。

「確かなのか？」

明るい声を出そうと努めたが、邦彦の喉から出た声はしわがれていた。唇の端が痙攣した。

「嫌なのね？ 欲しくないのね。私が嫌いになったのね！」

知佐子の瞳に、見るまに涙があふれてきた。顔が歪み、毛布の端を嚙んで啜り泣きを押し殺そうとした。

「馬鹿な。君が嫌いになったなんて！」

邦彦は一瞬にしてショックから立ち直った。音をたてて優しく涙を吸ってやった。

馬鹿な女だ。あれほど気をつけてたのに。このことが知佐子の家に知れたら、邦彦の目論みはガラスのように砕けちる。それに——邦彦にとっては、自分に似た子供が生れてきて、自分が苦しんできたように内面の葛藤に苦しまなければならぬということは、吐き気がするほどの重荷だった。

「ごまかさないで……」

しゃくりあげながら、知佐子とはぎれとぎれに言った。そうは言っても、涙に濡れた熱い頬を、邦彦の冷たい胸におしつけてきた。

邦彦の下腹は冷汗でしめっていた。体も冷たかったが、心も冷えていた。瞳にはさきほどの虚ろな光が甦っていた。

「医者に見せたのか？」

邦彦は優しく尋ねた。

「二カ月ですって」

知佐子は泣きやまなかった。

「泣くんじゃない……」

邦彦は知佐子の髪をもてあそんだ。これまで、幾人の女とこのような場面があったかと、ぼんやり考えていた。女と場面はちがっても、いつも、おなじようなものだった。胸の中がからっぽになり、邦彦は悪夢が去るのを念じるようにして女の泣きやむのを待っていた。だが、こんどの場合には少しばかり事情がちがった。墮せ、と冷たくつっぱねることは出来なかった。逆上した知佐子が両親に訴えれば、その結果は目に見えている。さらに、噂が実業界に知れわたったとすると、邦彦の前にたちふさがる厚い壁は、ますますその強度を増すであろう。

邦彦は、からんでいる知佐子の熱い脚から、自分の脚をぬいた。いまだけでも、知佐子をなだめておくことが必要だった。

「わかったよ、知佐子——」

邦彦は知佐子の耳に囁いた。

「二人して、君のお父さまに結婚のお許しをこいにいこう。恐らくお父さまはお怒りになって、僕と君を呪われることだろう。だけど、それでもいいんだ。僕には君さえあれば」

「本当、うれしいわ！ いまからいきましようか？」

知佐子は、泣きはらした目を輝かせた。

「今夜はまずい。もう少し気持の整理をしてからだ。それぐらいの間は待てるね？ それまではそっとして、誰にも知らさずにいてくれるね？」

「わかったわ。うれしい！ でも、なるべく早くね。やっぱり邦彦さんは、わたしの思ってたとおりの男らしい人だわ」

知佐子は邦彦に抱きついて笑った。

「じゃあ、今夜は帰ってぐっすりおやすみ……いや、それよりも、君の車でドライブでもしようか。こうなった以上、遅く帰ったからってお小言をいわれても、君はそう苦にならないだろう。車を飛ばしているうちに君の顔も直るよ。泣きはらしたままで帰っては、何のことかと思われるからね」

邦彦は知佐子の頬を軽くつついた。

「いいわね。車のキーはハンドバッグのなかよ。印旛沼いんばぬまの月が見たいわ。邦彦さん、運転してくださる？」

知佐子は、はしゃいだ。邦彦は身軽にベッドから降りた。立つと長身だった。若いけものをおもわせる筋肉は、盛りあがり、しなやかに屈伸した。

三

邦彦の運転するフォルクスワーゲンのカルマン・ギアー・クーペは、ヘッド・ライトで闇を切りきざみ、空冷式後部エンジンを咆哮させて赤い弾丸のように疾走した。

長身の邦彦は、小さな二人乗りのクーペのハンドルを、膝ひざのあいだにはさむようにしてあやつっていた。薄いスエードの手袋をつけていた。

着痩きやせするたちだ。スウェーデン製の生地を使った軽い上着が、邦彦のたくましい体をスマートに見せていた。鳩色のソフトを目深まぶかにかぶり、薄い褐色かつしよくのサンダラスの奥から、黒いベルトのように流れるアスファルトを見つめていた。

知佐子は、邦彦の右に坐っていた。スピード・メーターは百キロを越していた。車窓の左を山

の崖^{がけ}がかすめさった。右側は千葉の検見川^{けみがわ}の海だった。

大地をゆるがせて大型トラックとすれちがった。海岸の先に広がったノリそだのむこうに、遠く漁火^{いさりび}が点在していた。

「わたしの知っている人のなかで、あなたのように飛ばす人はいないわ」

車窓のガラスを細く降ろし、ピーッと悲鳴をあげて吹きこむ烈風に前髪をなぶらせていた知佐子が、上ずった声で言った。

「そして、乱暴に……いや、早く乱暴にとばすだけなら神風運転手はほかにたくさんいるよ」

「そうかしら？」

「だけど、僕はなんていったらいいかな……自分で言うのは何だが、距離とスピードに対するカンはだけは確からしい。目と神経が自分も知らないまに反応するんだ」

邦彦は唇の端をつりあげて笑った。

「だからクレイ射撃があんなにお上手^{じょうず}なのね。射場に来ているお医者さんが、あなたの目は何百万人に一つとかいってたわ。……そういえば、あなたとはじめて知りあいになったのは村山の射場だったわ。よくもあれだけ命中^{ちゆうちゆう}するものだ、感心して見てたの」

知佐子はヘッド・ライトの光芒^{こうぼう}のかなたに瞳をはなつた。瞼のむくみはひいていた。

カルマン・ギアのクレーペは、スピードを落して左に折れた。曲り角で、むこうからつっこんできた二台の神風オートバイが、ヘッド・ライトに浮びあがるカルマン・ギアの軽快な姿を認めて急停車した。むきを変え、邦彦と知佐子の乗ったクレーペを追いはじめた。

アスファルト道の舗装は悪かった。邦彦はクレーペのスピードを八十キロに下げた。二台のオ-

トバイは、空中に跳ねながらも百メートルほどの間隔をおいてくいついてきた。

「畜生」邦彦は小声で罵った。

「どうしたの？」

「カミナリ野郎がつけてくる。このワーゲンのような車を見ると、無性に敵愾心を燃やすらしい」

邦彦は穏やかな声で言った。二台のオートバイは、何度かクレーペを追いぬいた。ジャンパーとヘルメットに身を固め、風防眼鏡で目を隠しているのも、彼等の人相は定かにはわからなかった。水郷の夜景が車窓のまわりに広がっていた。真菰の揺れるクリークがめだった。鎌の形をした三日月が流れに写って震えていた。

邦彦は人家のないところを折んで車を進ませた。細い道にもクレーペを乗り入れた。オートバイは、ヘッド・ライトを見え隠れさせて、執拗についてきた。

雑草を車輪で轢き碎き、カルマン・ギアのクレーペは、沼を見渡す地点に停車した。あたりに人家は見えなかった。夜の沼は幽気をただよわせ、水面に魚が跳ね、月影をかきみだした。後ろからオートバイの爆音が近づいてきた。

「しつこいわね」知佐子は眉をしかめた。邦彦の唇のまわりが白っぽくなり、堅くひきしまってきた。車窓のガラスを降ろして深呼吸した。

オートバイは、クレーペの背後十メートルのあたりにとまった。ジーン・パンツに包んだ腰で調子をとりながら、二人の乗り手が近づいてきた。風防グラスを外していた。二人とも若かった。

「よお、凄え車に乗ってやがるじゃねえか？」